

## 8) その他の主要遺構群と出土遺物

筑後国府跡の特徴として、発掘調査が政庁域にとどまらず、その周辺でも実施されていることがあげられる。その結果、篠窯系須恵器・京都系土師器・国産陶器（図 3-1-12）をはじめ、南国諸島や東北地方との関連を示す土器（図 3-1-13）や、中国産磁器・イスラム陶器（図 3-1-14）などの輸入陶磁器が出土し、当地は物資の結節点であったと考えられる。また、律令体制の最盛期であったⅡ期政庁期の筑後国府は、東西に横断する官道を中心に、政庁や付属施設が造営され、諸施設を結ぶ道路や役人の住まい、工房などが広がる人の集積地でもあり、都市的機能を果たしていたことが判明してきた。

図 3-1-15 に示した中には、発掘調査後に開発のために遺構が破壊されたものも含まれるが、大部分は埋め戻され現地に保存されている。これらの遺構は、「国府＝政庁」の調査・研究・整備に終始しがちな国府跡という遺跡を、面的な広がりを持つ都市的空間として認識させるものであり、国府本来の姿を示す重要な遺構群である。特に、国府内の施設の計画基準となったと思われる東西に通過する官道や関連する曹司群などは貴重であり、一部は政庁などの重要遺構と重複することから、史跡指定地に保存されている。



図 3-1-12 緑釉陶器香炉



図 3-1-13 東北地方との関連を示す土器

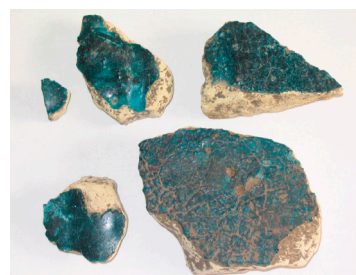


図 3-1-14 イスラム陶器

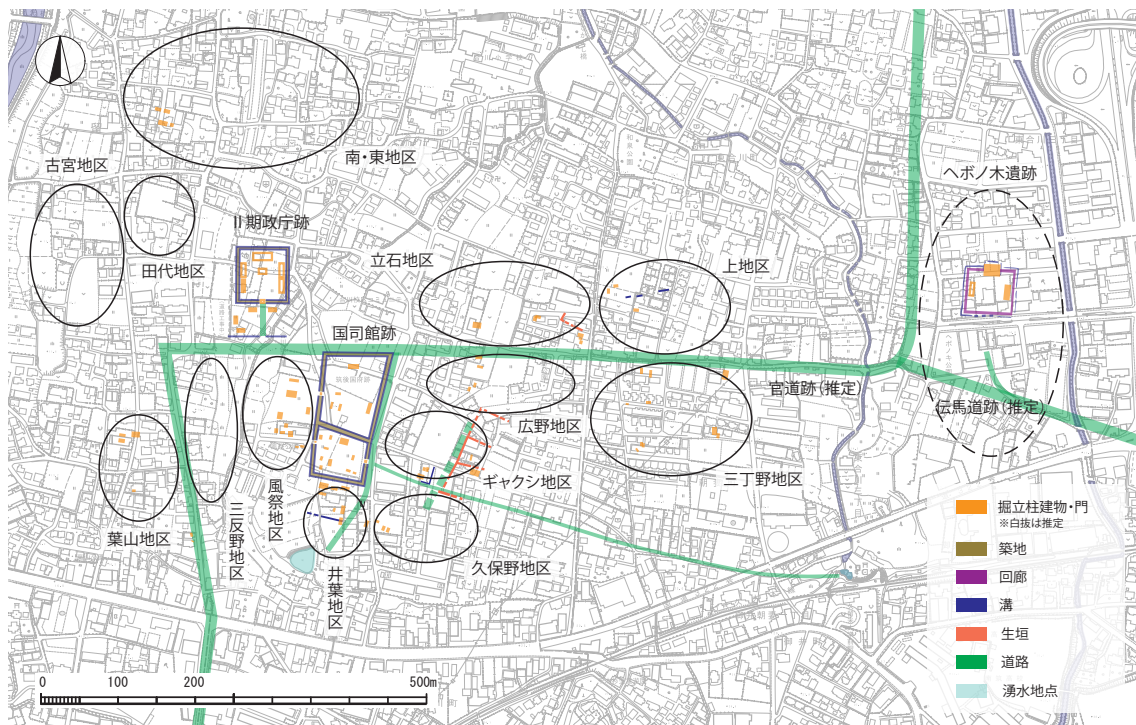


図 3-1-15 筑後国府跡主要遺構分布図（9世紀後半）

## 9) 関連遺跡

筑後国府跡に深く関わる周辺の遺跡には上津土塁跡、高良山神籠石、山川前田遺跡、へボノ木遺跡、筑後国分寺跡などがある（図3-1-16）。

上津土塁跡は、明星山から西へ派生した浦山丘陵の西端と、その南方の本山丘陵を結んで、上津荒木川が形成した谷部を塞ぐように構築された土塁である。築造時期は7世紀から8世紀である。また、高良山神籠石は、高良山の西側斜面に位置する神籠石系山城で、7世紀中頃の築造と考えられている。

筑後国府跡（前身官衙）、上津土塁跡、高良山神籠石に見える共通事項として大地震の痕跡がある。前身官衙では東限大溝の噴砂、上津土塁跡では噴砂・地滑りが検出されている。神籠石でも列石線が途切れていることから、円弧滑り等で斜面が崩壊したという指摘がある。これらの地震痕跡は山川前田遺跡の調査によって、『日本書紀』天武7年（678）条に見える「筑紫大地震」に起因するものであり、その時点で同時併存していたものと考えられ、白村江の戦い後の防衛施設と推察されている。

へボノ木遺跡は筑後国府跡の東側、井田川を挟んだ対岸に位置する遺跡で、7世紀後半から8世紀中頃の四面廂建物を伴う回廊状遺構が検出されており、寺院あるいは郡衙と評価される遺跡である。このほかにも8世紀代の筑後国府の官衙群に関連した居住用と推察される竪穴建物や9世紀代の掘立柱建物群などを確認でき、国府域の一端を形成する遺跡である。また、筑後国分寺跡は明星山から派生する丘陵先端部、現国分町に立地し、筑後国府跡の南方2kmに位置する。尼寺跡の実態は削平により定かではないが、僧寺跡では講堂・基壇・塔心礎・礎石抜き跡が検出され、徐々にその様相が明らかになりつつある。

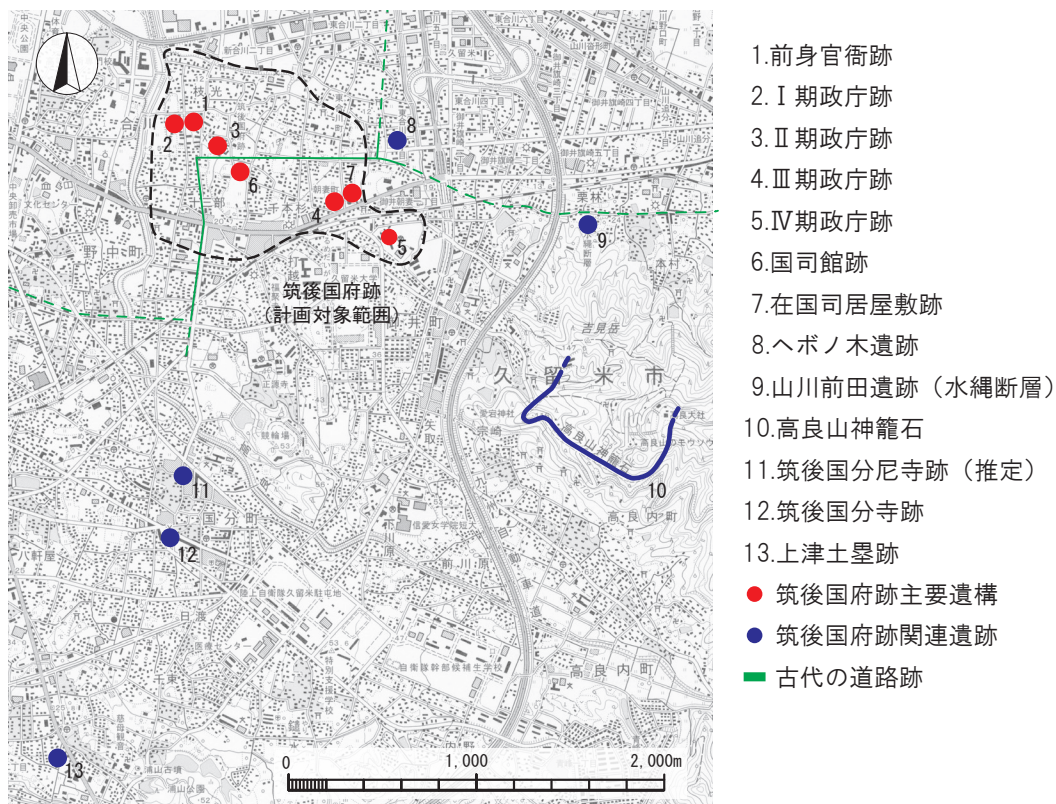


図3-1-16 関連遺跡位置図